

## 高校に聞く！ 高校が大学に期待する情報提供のあり方

### 神奈川県 三浦学苑高校

▶設立：1929年  
▶種別：全日制／普通科、工業技術科／共学  
▶生徒数：1学年約420人  
▶卒業生の進路状況(2019年度)  
大学・短大…60%、専門学校…25%、就職…13%、その他…2%



主幹教諭  
のざくらしんじ  
野櫻慎二

### 書類の仕分けと入力が大きな負担 生徒の探究を促す情報提供に期待

**Q** 大学から届く「紙」の情報を、  
今はどのように管理していますか？

毎年4月は、日々大量の郵送物の仕分けに追われます。最も気を使うのは、指定校推薦に関する書類のデータ化。ミスは生徒の不利に直結するので、「かつ／または」の条件の違いなどに注意を払って慎重に入力し、ダブルチェックをかけます。教員対象説明会の案内も、いつ、どこに、誰が行くか、100件近くを手作業で一覧化します。

**Q** デジタル化して届けてもらいたいのは  
どのような情報ですか？

全てデジタルデータでも構いません。特に指定校推薦に関する書類と教員対象説明会の案内をデータで受け取ることができれば、郵送物は半分以下となり、業務の大幅な削減につながります。進路指導時に、紙のパンフレットや入試要項を生徒と一緒に開くことがあり

ますが、これも紙でなければ困るものではありません。

**Q** 今後、大学に提供を期待するのは  
どのような情報ですか？

探究学習の助けとなる情報提供を期待します。2022年度入学生から新課程に移行するにあたり、探究学習の重要性が今以上に増します。学習者の自主性をもとに学びを深めていくという探究学習の性質上、生徒の好奇心に応えるには時に高度な専門性が必要になり、高校教員の知識ではカバーできないケースも出てきます。大学レベルの学問情報を知りたいときに頼れる情報——授業内容の一部を抜粋した文章や動画、直接的なサポートを受けることが可能な分野のリストなどがWeb上に公開されているとありがたいですね。

探究学習には、日頃の学習と進路を結びつけ、進学先選びを自分ごと化する効果があります。大学進学後も目標を持ち続けて学ぶ学生を増やすことにもつながるので、ぜひサポートをお願いしたいです。



教務部主任  
くぼよしひろ  
久保善啓

### 千葉県立 浦安高校

▶設立：1973年  
▶種別：全日制／普通科／共学  
▶生徒数：1学年約240人  
▶卒業生の進路状況(2019年度)  
大学・短大…27%、専門学校…42%、就職…20%、その他…11%

### 現状は「紙」中心だが、デジタル化による 生徒と専門家の交流機会の増加に期待

**Q** 大学から届く「紙」の情報を、  
今はどのように管理していますか？

指定校推薦に関する情報は、自分たちで一覧表にまとめ直しています。全書類を掲示するスペースがなく、また一覧表のほうが生徒の利便性が高いからです。一方、オープンキャンパスや教員対象説明会の案内は紙のまま扱っています。パンフレットや入試要項は大学ごとに整理して、進路資料室で自由に閲覧できるようにしています。

**Q** デジタル化して届けてもらいたいのは  
どのような情報ですか？

残念ながら本校では、教員間で情報共有ができるシステムや、生徒が利用できる端末等の環境がまだ整っておらず、デジタル情報をもたらしてもすぐに校務の効率化につながらないのが現状です。しかし、GIGAスクール構想などにより環境面の課題が解決すれば、オン

ラインを活用して大学との直接的なコミュニケーションが増えるであろう点は魅力です。

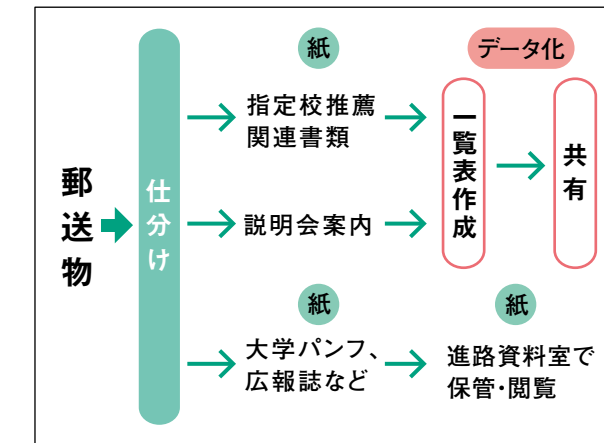
**Q** 今後、大学に提供を期待するのは  
どのような情報ですか？

大学の専門的な学びの内容を、高校生にもある程度理解できるような形で紹介するコンテンツが増えるとうれしく思います。

大学の学問は細分化、高度化が進んでいると感じており、高校までの教科学習との内容の差が広がることを懸念しています。大学から提供された情報で、生徒が専門的な学びに継続的に触れることができれば、学ぶ意欲が喚起され、「主体的・対話的で、深い学び」の実現に近づくと考えています。本校が1年次に実施している「探究ゼミ」では連携先の大学の先生方に生徒を指導してもらっていますが、これに加えて、オンラインでも直接／間接に大学の知見に触れる機会が増えれば、学習効果がさらに高まるはずだと期待しています。

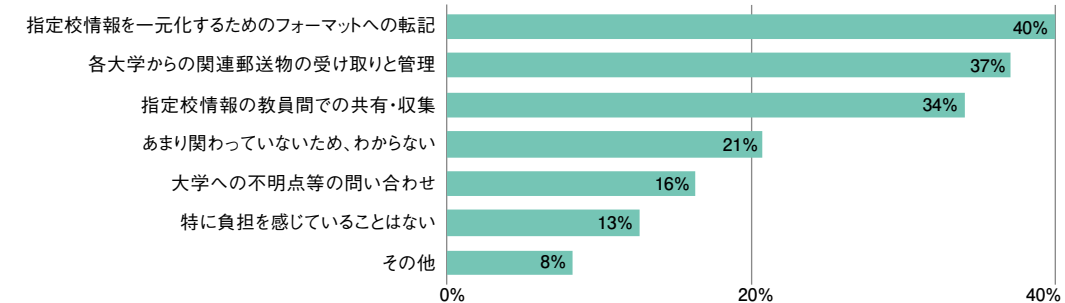


【図表1】高校に届く郵送物の仕分け方



\*高校への取材に基づき編集部にて作成

【図表2】高校教員の指定校推薦入試業務での困りごと



\*高校教員アンケート(ベネッセハイスクールオンライン調べ、2020年12月15日～2020年12月25日実施。回答人数6930人)

**紙→デジタルの変換を  
手作業で行っている現状**

コロナ対応を契機に学内のDX化に乗り出す大学は、その範囲を高校とのコミュニケーションにも広げることにより、互いの業務の効率化や高大接続の強化を図ることができそうだと期待されている。

多くの高校にとって、各大学から連日届く紙資料の仕分けは労力のかかる作業だ【図表1】。入試や大学説明会に関する情報は、手入力でもデータ化して校内で共有する高校が多い。特に指定校推薦については高校教員のおよそ4割が、情報の転記や郵送物の管理に悩まされている【図表2】。一方、大学側にとっても、手持ちのデータを紙の資料にする人的、金銭的コストは小さくないだろう。双方

の働き方改革の面でも、入試情報のデジタル化は喫緊の課題だ。紙資料のデジタル化だけではない。高校で今取り組みが進みつつある「探究学習」についても、左ページの高校教員の声にあるように、大学のサポートが望まれている。これは、大学の教育力を示すチャンスでもある。コロナ禍が終息しない限りは直接高校に向いての支援はしにくいのが、学内の教育、そして高校との情報流通経路がデジタル化されていけば、それは可能だ。文部科学省が進めている「GIGAスクール構想」——1人1台端末および高速大容量の通信ネットワークの整備により、高校側のデジタル環境も直に整う。それに備え、今から大学側も情報のデジタル化を進め、高大連携を深めていきたい。

# 高校から見たDX

高校や高校生との関係もDXによって強化が可能だ。進路指導の現場に立つ高校教員と、入試広報の第一人者の声を聞く。

取材／編集部 文／見山雄介